

## 大都市とねずみ

1970年頃から1990年代初頭までは、ねずみといえばビルに生息するクマネズミが問題とされてきた。ところが近年、ビルのクマネズミが住宅地域にまで分布を広げていることをうかがわせる事実が、特別区を中心に発生している。

東京都内の区市町村や保健所の窓口寄せられるねずみ被害の相談件数は、平成10年頃までは年間10,000件程度であったが、その後急激に増加し、平成13年度は約2倍の20,000件近くに達した。その後やや減少はしたものの、年間約16,000件の苦情・相談が寄せられており、その中で種の同定ができたもののうち9割以上がクマネズミである。相談件数の9割以上は特別区に寄せられたものであるが、ここ2、3年は特別区でやや減少傾向にある一方、多摩地区で微増の傾向にある。(図1, 2)

図1 東京都内のねずみに関する相談件数

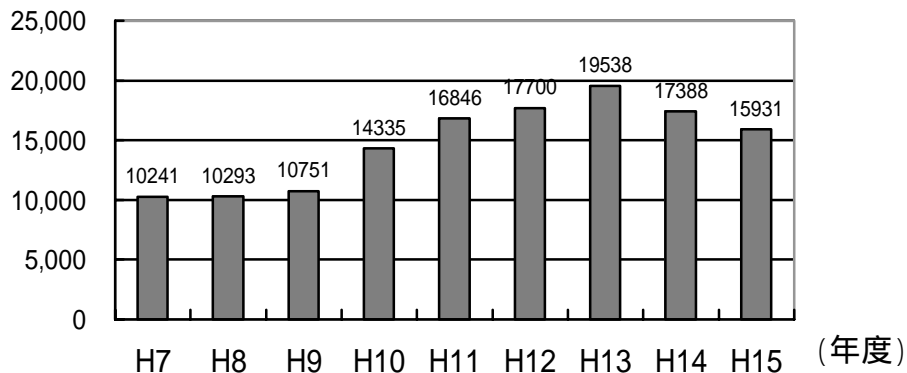
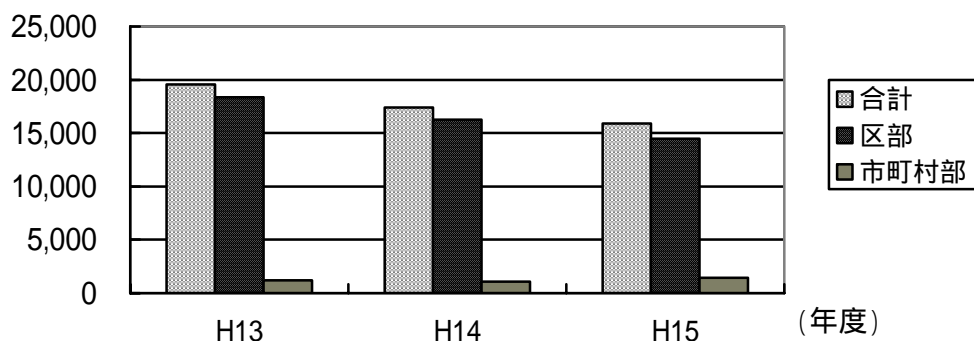


図2 東京都区部と市町村部における相談件数の推移



相談件数の増加は直接ねずみの個体数の増加を表すものではないが、相談件数と個体数はある程度比例すると考えられることから、少なくとも住宅地における個体数は増加していると推

測される。

ねずみによる被害増加の原因について考察するとき、それを単純に個人の生活の範疇に求めると、侵入口がある、餌になるものが放置されている、整理整頓が悪い等々の直接的な原因が多々挙げられる。しかし、視点を個人の生活のレベルではなく、都市問題という広い視点からねずみ問題を解析していくと、以下に示すような、都市構造の変化や、現代人の生活様式、そして高齢化などの社会経済状況の変化などが、相互に関連しつつねずみの増加に相乗的に関与していることが推測される。

## 1 都市構造との関わり

### (1) 都市構造の変化に伴うねずみの種類構成の変化

東京都衛生局(現、福祉保健局)が昭和30年に行った、都内のねずみ捕獲調査によると、捕獲されたねずみの種類構成は、ドブネズミ58%、クマネズミ41%であったが、昭和42年にはドブネズミ90%、クマネズミ10%とドブネズミが席卷する勢いであった。現在は、東京都による捕獲調査は行われていないが、既に述べたとおり、自治体に寄せられるねずみの相談のうち種の同定ができたものの9割以上がクマネズミであることや、次に示す調査結果等から、種類構成においてクマネズミが大きく優占していることが認められる。

ねずみ駆除協議会による調査：平成14年にねずみ駆除協議会が社団法人日本ベストコントロール協会の会員(防除業者)を対象に行ったアンケート調査では、ドブネズミの生息が施工現場の25%であるのに対し、クマネズミは約95%であった<sup>1)</sup>。

社団法人日本ベストコントロール協会による調査：同協会が平成15年に会員を対象に行った、一般住宅でのねずみ防除に関する実態調査では、ドブネズミの生息が認められたのは現場の15%であったのに対し、クマネズミは88%であった<sup>2)</sup>。

矢部(1997)は、都市のドブネズミとクマネズミの種類構成について、典型的な3段階を示している<sup>3)</sup>。第1段階は戦後から1960年代で、戦後しばらくは都心にもクマネズミが多かったが、年々ドブネズミが優占するようになり、一方クマネズミは一部の住宅や、当時数の少なかった都心の大型ビルで細々と生息していた。その後、第2段階である1970年代になると、都心のビル街でドブネズミは漸減し、替わって再びクマネズミが優占するようになった。さらに第3段階である90年代に入ると、ビル街だけでなく住宅街にまでクマネズミの分布域が拡大する兆候が見え始めた<sup>4)</sup>と述べている。また、種類構成の変化の主な理由について、第1段階は下水道・下水溝の普及によるドブネズミの分布拡大、第2段階は大型ビルの増加に伴うクマネズミの復活と殺そ剤によるドブネズミの選択的駆逐を挙げている。

もともと熱帯ジャングルが原産地であったクマネズミは、樹上生活が得意であるため高層ビルの構造にも適応し、また冬も暖かく天敵もおらず、さらに厨芥などの豊富なエサのある環境で、確実に数を増やしていったと考えられる。一方ドブネズミは、クマネズミに比べて警戒心が弱く、殺そ剤にも感受性が高いため、民家やビルでは殺そ剤や捕そ器で容易に駆除されて減少し、下水溝の中や地下鉄構内、地下街などで生息することとなった。ビルの環境に適応したクマネズミは、警戒心が極端に強いため、殺そ剤を警戒して食べず、捕そ器にもかかりにくかった。さらに、殺そ剤に対する強度の抵抗性を持った、いわゆる「スーパーラ

ット」が出現したことも、クマネズミ増加要因の一つと考えられている。このようなねずみの生理的要因に加え、一般住宅の建築様式が以前に比べて格段に進化し、気密性が高まり、寒さに弱いクマネズミにとっても快適に過ごせる環境となったことも、クマネズミの生息域拡大の要因となっていると考えられる。

## (2) 再開発

老朽化した建築物内やその周辺には、一般に多くのねずみが生息しているが、再開発工事に伴って取り壊される建築物内や周辺から、生息していたねずみが一般住宅など他所へ移動すると言われている。

この現象はまだ証明されていないが、防除業者やねずみ研究者などの間では経験的に知られている。また実際に、再開発地域に隣接する住宅地域からの被害相談が増加していることから、(1)で述べた第3段階におけるクマネズミ分布拡大には、都市の再開発が大きく関与していると考えられる。

また、都市開発に伴って、古い商店街などが整理され、新たに大規模な商店、飲食店、娯楽施設を複合したモールが増加していることも、ねずみ増加の一因となっていると考えられる。

## (3) 地下開発や鉄道網の整備

都市の開発は地上だけではなく次第に地下部へと広がっている。ビルや地下街は地下鉄の駅などとも連結しているが、このことはねずみに営巣場所を提供するだけではなく、ねずみ人が人など外敵に邪魔されることなく、広域に移動するための格好の場所を提供することとなっている。

## 2 都市生活者の生活様式との関わり

### (1) 活動の終日化

膨れあがる都市生活者の活動に伴って、昼夜絶え間なく、いたる所で提供される飲食物が、他方では、ねずみに豊富な餌を四六時中にわたって提供していることになる。このような昼夜途切れることなく繰り返される活動は、人間だけではなく、ねずみの採餌活動にとっても好都合である。また、飽食の影響はねずみにも餌選択の幅を広げている。

### (2) 大量消費と廃棄物

生活に伴って処理しきれないほど出される廃棄物やそれらの不法処理や投棄、管理の不徹底は、厨房や飲食施設内だけではなく、外部の集積場周辺にも厨芥類を散乱させ、カラス問題と同様、ねずみに餌を提供する原因になっている。本来の利用者ではない者が、集積場所や集積箱にゴミを運んで捨てるなどの行為が、管理の困難さに一層の拍車をかけている例も多い。また、飲食物以外でも、整理が悪く、乱雑に放置されていたり、不法投棄などが行われたりしている場所では、ねずみがそれらの隙間を住処や隠れ場所として利用することになり、それらの場所を拠点として、広範囲に活動場所を広げる。

### (3) コミュニティ活動の弱体化

地区の連帯感が弱まるにつれて、煩わしいことや自分に関わりが少ないことへ関心が低下し、他人へ責任転嫁をするなどの行動も増加する。この結果、その地域の様々な情報が行き渡らなくなるため、ねずみ対策などに対しても極めて後ろ向きになり、身の回りの対策すら自ら行うことが少なく、行政などへの依頼が増えてくる。このようなコミュニティ活動の弱体化は、早急な対策の実施を困難にし、対策の不徹底を招くだけでなく、ねずみ対策に対する知識や必要性の認識を一層希薄化するといった悪循環を引き起こす。

## 3 高齢化社会との関わり

### (1) 進む高齢化

平成 16 年 9 月 15 日現在における東京都の 65 歳以上の人口(高齢者人口)は、216 万 1 千人で、総人口に占める割合は 17.8%であり、人口、割合ともに平成元年以降過去最高となった。65 歳以上の人はこの 1 年間で 6 万 1 千人増加し、総人口に占める割合も、1 年間で 0.4 ポイント上昇している(調査・統計資料 1)。

東京都が予測した高齢者人口比率の推移を見ると、総人口に占める高齢者人口の割合は、平成 12 年には約 15.8%であったものが、年に約 0.5%ずつ上昇し、平成 32 年には、総人口の約 4 分の 1 が 65 歳以上になると推定されている(調査・統計資料 2)。

### (2) ねずみに狙われやすい高齢者世帯

高齢者の増加とともに、介護支援が必要な高齢者の数も増加すると予測される。平成 14 年度の第 1 号被保険者(65 歳以上の被保険者)のうち、要介護(要支援)認定者数は、1 月末現在で 27 万 5 千人であり、高齢者人口の約 13%にあたる(調査・統計資料 3)。

一般住宅でのねずみ被害は、近年特に高齢者世帯に多くなっている。その理由は、加齢に伴う A D L (日常生活動作機能)の低下により、家の中の整理整頓、食品の保管や厨芥の処理などがおろそかになり、ねずみにとって巣材や餌が得られやすい環境となるためである。また、ねずみ被害のある高齢者世帯のほとんどは、ねずみの通路の穴塞ぎや侵入したねずみの駆除を自力で行えず、また経済的な理由から効果的な防そ工事などの根本的対策をとることができないため、ねずみの侵入を放置している状態にある。

東京都健康局(現、福祉保健局)は、平成 15 年度に、東京都介護支援専門員研究協議会の協力を得て、同会員(ケアマネージャー)を対象とした高齢者宅のねずみ生息状況及び被害に関するアンケート調査を実施した(調査・統計資料 4)。調査対象数は 815 件で、回答数は 55 件、回答率は 6.7%であった。調査の結果、74.5%(特別区のみでは 86.3%)のケアマネージャーが過去 1 年間に介護支援サービス利用者宅でねずみによる被害があったと回答した。また、過去 1 年間の介護支援サービス利用者 2,348 人中、ねずみ被害のあった人数は 107 人であり、その割合は 4.56%(特別区のみでは約 6%)であった。被害の内容の中には、糞の散乱やイエダニの刺咬による搔痒などのほか、利用者がねずみに噛まれる咬傷事例も含まれていた。

#### 4 防除に関わるその他の問題

##### (1) 有効な殺そ剤の開発問題

現在、わが国においては、クマネズミに対して有効な殺そ剤の開発が行われにくい状況にある。それは、薬事法による殺そ剤の許認可が容易でないことや、マーケットサイズ等の問題に加え、これまでの効力試験が主としてドブネズミに対して行われ、クマネズミによる検討が僅かしかされていなかった等の理由が推察される。欧米ではクマネズミに有効な製品が既に販売されており、また、最近になってようやくわが国においてもクマネズミに有効な新薬開発の動きが出てきている。今後は、クマネズミの殺そ剤抵抗性対策の一つとしても、すみやかなる新薬開発が望まれる。

##### (2) 防除に関する法的根拠の問題

伝染病予防法が感染症予防法に改正されたことに伴い、平常時におけるねずみ対策実施への法的な根拠が薄くなり、予算の裏付けも作りにくく、平常時の対策が行われなかったり、対応が遅れ勝ちになったりする。

#### 5 「大都市とねずみ」 まとめ

近年の東京都内におけるねずみ被害増加、生息拡大の原因を、都市の構造的側面から考察していくと、都市構造の変化に伴い、クマネズミが環境に適応して増えていったこと、雑居ビルが再開発や不況で取り壊され、住処を失ったクマネズミが住宅地に侵入したこと、及び地下街や鉄道網がねずみの巣場所となるだけでなく、移動の通路にもなっていることなどが挙げられる。次に、都市生活者の生活様式に関連した部分では、人間の活動の終日化とともに、ねずみの餌となる飲食物が至る所で提供されていること、ねずみの食料となる一般家庭や飲食店からごみ集積所に出される廃棄物が大量に存在することなどが要因になっていると考えられる。さらに、ねずみの侵入に自力で対応できない高齢者世帯が多くなってきていることや、人々がねずみに対し無関心になっていることに加え、防除方法や、殺そ剤の開発が立ち遅れていることなどが、相互に関連しながら被害増加に関わっているものと推測される。

#### 生息の実態

##### 1 生息状況調査

ねずみの生息状況について、都内の区市町村や保健所に寄せられる相談件数が急増していることは、既に述べたとおりであるが、ここではより詳細な生息実態を把握するために自治体や研究機関等が実施した調査結果を紹介する。